



秘密のデートは 母親と

巨道空二
挿絵 / アレグロ

立ち読み版

序章	息子の視線の先には……………	4
第一章	ママの肌に輝く水滴……………	8
第二章	母の手と息子の手と……………	41
第三章	喪服の裾から覗く下肢の眩しさ……………	89
第四章	デートコースは羞恥の蜜に濡れて……………	131
第五章	職場の彼女の衣服の下で……………	176
第六章	夜に浮かぶは白き肌……………	225
終章	母の肌はなお白く……………	277

登場人物

Characters

来島 聡

(くるしま さとし)

若く美しい母・美里に禁忌の愛情を抱くマザコン気味の高校生。美里と二人暮らし。

来島 美里

(くるしま みさと)

女手一つで息子を育てる聡の母。凛々しくも包容力のある三十代半ばの女性。スポーツクラブに通っており、引き締まったウエストにEカップバストを持つ。



序章 息子の視線の先には

身体が熱く、重い。軽い疲労感にふと上を見上げれば高い天井に周囲の音が反響し、かすかに尾を引いているのがわかった。朝のジムはまだ空いていて人の数は数えるほどもない。久しぶりだが、いつも通りだと思った。

ちよつと線の細い印象の少年はベンチに腰掛けると、手にしていた清涼飲料水をあおった。ボトルからこぼれ出る冷たい液体が喉を潤していくのが心地よい。

「もう。そんなに一気に飲んじゃだめよ、聡君」

横にいた女性がくすりと笑った。年上だ。年齢としては少年より一回りほども上、二十代後半といったところに見える。トレーニング用の薄いシャツとショートパンツから覗く白い肌が眩しい。

トレーニングのせいか成熟した肌は艶もよく、見事なプロポーシオンは引き締まり、見るものがドキリとするような鮮烈な印象を残した。手足や腰は細く締まり、胸や尻はぐつと張り出している。男なら思わず息苦しさを覚えてしまいそうだ。

「一気飲みは身体に悪いわよ」

魅惑的にすぎる身体がすぐ横に腰掛けると、少年は視線をそらした。かすかに鼻の頭が赤くなっていた。

「ちえっ。こんなところまでお小言はなしだよ、母さん」

Tシャツと短パン姿の少年が不満そうにつぶやきながら、ためらいがちに横に視線を走らせた。母さんと呼ばれた女性は自分は紙コップのソフトドリンクで喉を潤していた。細い喉。白いうなじまではつきりわかるショートボブの髪はさっぱりとした印象を与え、女性としてはくつきりとした眉のおかげで、意志的な印象を形作っている。切れ長の目は黒瞳が文字通り輝くようで、内に秘めた意志の強さにひるんでしまいそうだ。その一方で小鼻は上品で、唇はちよつと受け口と、目や眉の意志的な印象とは裏腹に無防備な感じだ。

「うふふっ。聡君が久しぶりにジムに出て来てくれたんだもの、嬉しいわ」

白い喉が動くのから目が離せなくなってしまった。運動後の滑らかな肌が汗ばんで、うつつすらとピンク色に色づいているのがあまりに誘惑的だ。喉元から鎖骨までの白い肌が眩しくて、よい香りが漂ってくるのに陶然となつてしまいそうだ。

呼吸に上下する胸元では水滴となった汗が流れ落ち、シャツに隠れている胸の谷間に消えていく。誇らしげにシャツを持ち上げる乳房がポリリウムたつぷりの曲面を布

地越しに見せつけているのが息苦しいほどだ。

「たまには来いって、母さんがうるさいからね」

少年の視線が泳いでいた。視線をずらしたのに目の前の光景が魅力的にすぎ、まるで磁力を帯びているように少年の目を引きつけていた。トレーニング用のショートパンツも下半身に密着して、きゅつとくびれた腰から引き締まった下腹部、ぴっちりとは張りつめた太腿が覗けている。よく鍛えられた魅惑的なボディだった。

汗で濡れたシャツが肌に張り付き、ブラジャーの輪郭が浮き上がっている。さすがに透けない素材を選んでいるようだが、成熟した女性の柔らかくふくよかな曲面がはつきりとわかる。手に余りそうなボリュームが目の毒だ。

「うるさく言うわよ。せつかく家族会員だから、使わないと損じゃない」

女性が紙コップから唇を離れた。思わず、カップの縁に口紅の跡がついていないか目をやってみよう。来島美里くるしまみさとというのが彼女の名前だ。実際の年齢も三十代半ばと若いのだが、外見は二十代といっても通用するほどだ。その一方で落ち着いた雰囲気から、ちょっと年齢不詳といった感じもする。

「さて、一休みしたらもう少しがんばろうか。聡君？」

にっこりと笑うと、意志的な瞳が優しくとろけそうになる。小さい頃はいつもこの

笑顔に向かって駆け寄り、見上げたのを思い出す。数年前にはパートから正社員に転向し、家計を支える彼女に頭が上がるはずもなかった。

「う、うん。そうだね」

たった今ドリンクを飲み干したばかりなのに、喉が渴いたような気がした。しばらく見ないうちに、母親の身体はまた魅力的になった気がする。母親ゆえに目をそむけ、避けてきたはずなのに、この日のジムで久しぶりに見た母の身体は無防備にすぎて、少年の脳裏に焼き付いていた。

バネの利いた軽快な、そして優雅な動きはよく鍛えられた筋肉によるものだ。普段は職場でバリバリ働いているだけあって、動きの一つ一つもキビキビしている。

(なんで母親なんだよ。くそつ。そんな身体、ぼくに見せるなよつ)

もつとも近い血の禁忌。そんなことはわかっている。だから、母親から目をそらせ、なるべく遠ざかろうとしていたのに、夫を亡くしている美里はひたすらに一人息子の聡に愛情を注ぐ。それをわかっている少年は母親から遠ざかることもできずに悶々と毎日を過ごしていたのだった。

第一章 ママの肌に輝く水滴

自転車というのはカロリー消費が意外と激しいものだ。田舎のアップダウンの激しい道を走ればそれだけで息が切れ、汗をかいてしまうのはまだ若い少年も例外ではない。薄暗くなった住宅街を軽快に駆け抜けていくのは心地よい。汗をかきはするものの、風を身体に感じるのは好きだった。

(ちよつと、遅くなっちゃったな。急がないと)

門限がうるさいというほどではないが、心配性の母親を安心させておくためにあまり遅くならないように気をつけていた。片親のせいか、なにかとうるさいのであまり刺激しないのが一番なのだ。

(ママ、遅くなるとうるさいもんなあ。高校生だつてつきあいがあるんだけどな)

外では母さんと呼ぶのだが、家の中や思考では昔のママという呼び方のままだ。スポーツタイプの自転車のペダルを踏み込み、暗くなってきた家並みを通り過ぎながら母親のことを考える。

若く美しく、同級生からもうらやましがられるのはいいが、いつも一緒にいると、

やはり違う。少年にとっては来島美里という女性は母親以上の存在であって大きな憧れの対象であると同時に、決して手を出せない、出してはならない遠い存在だった。いや、遠い存在としておき続けようとしてきたのだった。

自転車のブレーキがきゅつと音を立てて細めのタイヤが止まる。スタンドがいつもの軽快な音を立てて立ち上がった。学生服姿の少年は背負っていたバッグを手に提げると玄関に向かう。

「ただいま」

返事がない。母が通勤に使っている自動車は車庫にあつたので近所に出かけているのかもしれない。自室に戻って学生服やカバンをベッドに投げ出した少年は、汗を流すために風呂場に向かった。

（父さんが亡くなってから十年か……父さんが生きていたら、違つたのかな）

もし父が生きていたら、美里との愛情たつぷりな毎日を見せつけられていたかもしれない。それはそれで苦しいかもしれないが、あきらめがついたかもしれない。だが、その父親はいない。もしかしたら息子の相談を受けることができたかもしれない人物は、先祖代々の墓に眠っている。

（考えてもしかたないか。先にシャワーでも浴びよう）

来島家の風呂場は脱衣室とつながっていて、階段の近くにある。少年は汗に濡れた身体を意識しながら脱衣室の扉を開いた。

カチリとかすかな金具の音がして扉が開いた瞬間、少年の身体は硬直していた。暗いはずの脱衣室は明るかった。そして、彼女が、いた。

輝くように艶やかな肌は白く透明感を保ったまま、いかにも柔らかそうな曲面を見せている。ほっそりとした首筋。濡れてボリュームを失った黒髪が首筋に張り付くようにしているのにドキリとする。

丸く見開かれた目。黒い瞳は濡れたように輝き少年を見つめている。小さく開いた唇が彼女の驚きを示している。普段は意志の強さを感じさせる眉も目もあまりに無防備で、晒された肌は全く隠せていない。

「さ、聡……くん」

脱衣室の向こうの浴室の扉がちょうど閉じたところらしく、用意してあったタオルに手をかけようとしたまま、母親の動きが凍り付いたように止まっていた。

いやでも目に入る胸元は想像以上に発達した乳房が二つ、きれいなお椀状に盛り上がり、美巨乳の間にはくつきりとした谷間が刻まれている。白い肌にはまだ水滴がつ

いたままで、照明の光にキラキラと輝いている。

時が止まったような情景の中で彼女の呼吸とともに乳房がかすかに上下し、色づいた可憐な蕾が、その頂点で揺れている。あまりに誘惑的だ。

「き、きれいだ……ママ、綺麗だよ」

それは少年の心からの賛辞だった。小学生の頃、一緒にお風呂に入って以来見たことがなかった母親の裸体は想像以上に美しく、肉感的だった。成熟したむっちりとしたラインは、それでもたゆまぬトレーニングによってしっかりと引き締められ、絶妙なバランスで若い男の本能を強烈に刺激していた。

下半身は下半身で、しなやかな筋肉を秘めた太腿からふくらはぎへの複雑かつ優美なラインが魅惑的で、桜貝のように透明感のあるピンク色の爪が美しい。引き締まった下腹部は太腿と形作る三角地帯周辺でこんもりと盛り上がり、薄墨を刷毛で掃いたような恥毛の翳りすらもが美しく見えた。

「や、やだっ……」

目元を朱を散らしたように赤く染めた美里の手が胸を隠した。たっぷりとした乳房がたわんで胸の谷間が強調され、思わず息を飲んでしまった。

「あ、ごめん。その。ママ、綺麗だったから……」

「嬉しいけど、困るわ。その、聡君、出ていってちょうだい」

目をそらした美里の顔はもう真つ赤だ。年頃の息子に肌を晒してしまった羞恥は少年にはわからないが、いつも明るく優しく、そしてちよつと強気な母親が羞恥に身をすくめている様子はあまりに新鮮で、視線が張り付いてしまったように動かない。

(すぐく綺麗だ……アイドルとかより、ずっと綺麗だ)

目の前の生々しい、現実の女体に圧倒されてしまった少年がそう思ったのも当然だったかもしれない。すっかり頭に血が上ってしまった若者は自分でも思ってもみなかっただ行動に出てしまっていた。

「きゃあっ」

小さな悲鳴は、腕の中から発せられていた。柔らかく、温かいモノが腕の中にある。フローラルのシャンプーの香りが鼻腔をくすぐった。頭の中が真つ白になっていて、それが何かすら意識していない。ただただ心地よく、甘美な感触が腕の中にあつて、それは無上の幸福だという気すらしていた。

柔媚な、みっしりと中身がつまった柔らかさ。胸の、お尻の重みを感じる。腕の中に美里を感じるのがこれほど幸せなことだと、少年は今初めて知った。

「だ、だめよ、聡君っ。離れてっ。出ていってちょうだいっ」

いつも毅然とした母親には似合わない、弱気な声。普段なら誰にも見せないだろう動揺した表情。彼女の身体は、こんなに小さかったのだろうか。いつだって見上げて、尊敬してきた母親の身体はこの腕に収まってしまふほどに小さくて、柔らかくて、温かい。思わず、思いが言葉になって口から出てしまっていた。

「ママ、好きだよ。やっぱり、ママが一番だ」

母親だからこそ目をそむけ、距離を置こうとしてきたのが、いきなり目の前に現れてしまった。千載一遇の幸運に間違いなかった。

「さとし、くん……？ な、何を言ってる……や、やめなさいっ」

「うわあっ」

無意識のうちにさらに彼女を引き寄せ、顔を寄せようとしていたのを振り払われたと気づいた瞬間、びっくりするほどの力で突き飛ばされた。いつもスポーツジムで鍛えているだけあって、びっくりするほどの力だった。

「いたた……」

リビングには慌てた美里が出してきた救急箱が開いていたが、少年の傷もせいぜい打ち身程度で、たいしたことはなさそうだった。

「ごめんね。まだ痛むかしら？」

ブラウスやスカートを身につけた母親が心配そうにするのを、手を振って制止する。気遣わしげな視線が、かえって心に痛い。言ってはならないことを口に出し、行動にまで出てしまった少年が全ての責を負うべきであつて、母親に心配される権利などないとする思つた。

「いや、ぼくが悪いんだから。ママは悪くないよ」

長いまつげが美里の頬に影を落としているのがわかる。通つた鼻筋と、上品に小さくまとまつた小鼻。唇は薄めだが口紅がなくとも艶を感じさせる。化粧などしてはいはずなのに、素颜でも十分に美しい。小学校から高校まで、こんなに若く綺麗な母親を持っていたのは自分だけだつたと今更ながらに思う。

「ううん。お母さんが鍵をしつかりかけていなかったのも悪かつたのよ」

譲ってくれるのは母の優しさなのかもしれないが、抱き寄せ、口にまで出してしまつたのは聡だ。とても言い逃れられるレベルではない。美里が悲しげな表情でいるのが悲しく、情けない。

「その……どうして聡君、あんなことをしたのかしら？ それに私のこと……」

答えられなかった。いや、答えられるわけがない。実の母親に欲情してしまつたな

ど、当の本人相手に言えるわけがなかった。

聡は脱衣室に侵入し、裸の女性に抱きついた卑劣な痴漢同然だった。尊敬し、愛情を注ぐべき母親に心配されるような人間ではない。

「そ、そうよね。聡君も年頃だものね。あんな格好見せられたら私なんかでも……」

「違うよ。ママだからだよ。ママ以外の人に、あんなことはしない」

やっと少年の口から出た言葉には力がこもっていた。自分のせいで美里に自らを下すようなことは言わせたくなかった。

「ママはすごく綺麗で、それでぼくは……その、いつも……」

そこから先は口には出せなかった。いつも恋い焦がれ、自慰の妄想に登場させていたなどと言えるものではない。少年の妄想に登場するのは同級生などではなく、常に美貌の母親なのだった。

「そう……でも、聡君。お母さんは、お母さんよ」

うつむく少年を見つめる美里は悲しげだったが、それでも瞳は優しい。自分の息子をいかに傷つけずに道理を説くべきか考えているらしい。

「わかってる。わかってるけど、どうにもならないんだ」

彼女が自分の母親であることも、どうにも越えられない壁があることもわかってい

る。少年とて他の女性に目が向かないわけではないけれど、結局のところ美里に似ている女性を探しているだけで、家で待つてくれている彼女のところに戻ってしまう。

「年頃の女性を好きになってもらわないと、お母さん、困っちゃうわ」

「うん。それは、そうだよ。でも、お母さんが一番だと思っから」

親の立場からはそうだろう。だが、その年頃のどの女性よりも実の母親が魅力的である場合はどうすればいいのか。実際に美里を初めて見た人はまず間違ひなく聡の姉だと思ひこむほどで、母親と聞くと自分の耳を疑うくらいなのだ。そんな若い彼女に少年が女を感じても不思議ではなかったかもしれない。

「それから、あんなことをしちゃだめなのよ。親子なんだから」

「わかってるよ。わかってるんだっ」

握りしめた拳に力が入り、白くなった。自分がいかに馬鹿なことをしたかもわかっている。それなのに、たぶん自分があの体験を妄想して夜を過ごすだろうこともわかっていた。あの体験があれば、あの美里の裸体の記憶があればほかに何もいらぬ気すらするほどだ。

「ママは、ぼくのママなんだ。ぼくが一番よくわかってるっ」

頭をかきむしる少年を、美里は痛ましげに見つめていた。苦しんでいる息子を前に、

かすかに目に涙を浮かべていた。ショートボブの髪は湿気を帯びてポリウレームを落と
しているが、それがかえって清楚さを引き立たせていた。

「我慢できなかったの？ 苦しかったの？」

髪をかきむしる息子の手をそつと押さえた美里が悩ましげに囁いた。

「うん……他のことが見えなくなつて、どうにもならないんだ」

美里の手は柔らかくて、温かい。

「ママの顔が浮かんできて、寝られないんだ。だめだつてわかっているのに」

「聡君、そんなにママのこと……」

母親が深いため息をついた。ソファの横に座つてそつと聡の肩に手を触れると、そ
のまま優しく抱きしめる。びくりと少年の身体が震えるのをなだめるように息子の身
体に手を回し、包み込むようにして語りかける。

悲しげな表情は、息子の悩みに気づけなかつた後悔だろうか。かすかに震えていた
唇が、やがてしつかりと結ばれた。そのままそつと少年に身を寄せていく。

「そうよね。男の子だもの。苦しかったわよね。ママもわかつてるから」

肌を磨いたばかりの成熟した女性の柔らかさに包まれて全身に緊張が走つた。甘い
香りにくらくらしそうなくせに、身体の一部が急激に熱を持っていた。耳元で囁かれ

る優しい言葉に背筋がゾクゾクしてしまふ。

「もつと早く、ママが気づいてあげられればよかつたのかな。もう大丈夫よ、聡君」
そつと抱きしめてくる母親の腕が滑らかで、柔らかすぎるほどに柔らかい。風呂上がりの女性の肌の甘い香りが少年の鼻腔を満たし、クラクラしてしまふ。

「こんなこと、本当は……だめなんだけど。聡君のためだもの」

耳のすぐ近くに母親の唇がある。身動きもできないうちに柔らかい唇が頬に押し当てられていた。硬直したままの少年をそつと抱きしめながら、美母は優しく囁いた。

「聡君が苦しんでいるのなら、ママがなんとかしてあげなくちゃいけないものね」

美里が自称でママを使うのは、ずいぶん久しぶりのことだと思つた時には彼女の手が少年の下半身に伸びていた。短パンから伸びる若者の太腿にしつとりとした女性の手が触れ、身体が震えるような快感が生じた。

「マ、ママ？」

「聡君のもやもや、ママがなんとかしてあげる」

動揺する聡の手を優しくどかしながら、ほっそりとした指が巧みに動きファスナーを開き侵入してくる。まだ女性経験などあるはずもない少年の動揺は激しかった。

「だめだよ、ママ。やめてよ……くうっ。そんなところっ」

「大丈夫。ママにまかせて。楽にしてあげるから」

愛息の頬に口づけを繰り返しながら、優しく肩を、背中を撫でていくとそれだけで少年の肩が震えた。思ってもみなかった母親の愛撫に全身の皮膚が敏感に反応し、肌が粟立つような快感が広がっていく。

「男の子って、苦しいのよね。ママが気づいてあげられなくて、ごめんなさい」
「そ、そんなことないから……や、やめてよっ」

「いいのよ。本当はだめだけど、聡君のためなら……ママがしてあげる」
ぴつとりと身体を押しつけてくる女性の柔らかさがあまりに気持ちよすぎて、押しつけることもできない。ふつくと柔らかい乳房の膨らみが二の腕にあたり、たわんだ乳房に包まれるような感覚に身体の一部がさらに熱を持っていく。

「聡君の、すぐく固くなってる。こんなに苦しくさせてたのね、ママ……」
悩ましげな声が若者の耳に染み込んでいく。彼女のせいじゃない。自分が悪いのだと言いたいのには、身体が思うように動かない。美里がまさぐってくる股間の一部だけが熱く固く立ち上がり、痛いほどになっていた。

「くすす。ここはもう元気ね。ピクピクして、可愛いわ」

男の象徴を可愛いと言われるのは複雑な気分だったが、思慕をつのらせてきた美里

の手がペニスに触れていると思うと、それだけで射精してしまいそうだ。ヒクヒクとうごめくモノをほつそりとした指が包み込むと、しつとりと柔らかい掌のすべすべした感覚に肩をすくめてしまう。

「マ、ママ……だめだよっ。こんなこと、まずいよっ」

「大丈夫よ。本当にエッチするわけじゃないの。聡君に、出させてあげるだけ」

出させてあげる。その言葉が意味するのは一つだった。本当にエッチするわけじゃないということ。手や、もしかしたら口でしてくれるかもしれないということ。気づいた瞬間、男根はこれまでにないほどに激しく勃起していた。

母親の優美な手が自分の股間をまさぐり、いつの間にかペニスを完全に露出させてしまっていた。すでに真っ赤に充血した亀頭がピンピンに張りつめ、激しい興奮を露わにしている。

「うふふっ。ここもすっかり大人になったのね。こんなに遅くなって」

夫を亡くし、息子にだけ愛情を注ぐようになってから十年が過ぎている。惜しみなく愛情を注ぎ手をかけてきた我が子を愛撫する様子はどこかうっとりとして、嬉しそうに瞳を潤ませていた。

「ううっ」

軽く握られるだけで、自分でするのは次元の違う愉悦がまるで電流のような激しさで少年を直撃する。ビクン、ビクンと大きく反応する。ペニスも文字通り天を衝くほどの急角度でそそり立ち、常でない熱さと硬さで強烈に自己主張していた。

「あら、こんなに感じてくれているのね。ママ、嬉しいわ」

細く白い、文字通り白魚のような指が自分のモノにからみついている。それだけで頭の中が真っ白になってしまいたいようなのに、股間のモノはまるで別の生き物のように嬉しそうに反応し、先端からねっとりとした液体を漏出させていた。

「ううっ。で、でも、ママ。ぼくら、親子なのにつ」

「そうね。親子だから、してあげるの。聡君が苦しいのを、ママが除いてあげる」
母親は真剣だった。彼女なりに考えた結論なのかもしれない。

「大丈夫。聡君の苦しいモヤモヤを解消させてあげるだけだもの」
成熟した女の声がねっとり耳にからみつく。モヤモヤを解消するだけ。言葉は軽い、それはひどく後ろ暗く、取り返しがつかないことになってしまいたいような気がする。胸の奥が疼くのが確かにわかった。

「怖い？ 大丈夫。何も怖いことなんかないわ。ほら、こつちを向いて」

頬にキスした唇が小刻みなキスを繰り返しながら少年の唇に近づいていく。逆らえ

なかった。思わず彼女の方に顔を向けてしまうと、お互いの唇がぴったりと重なりあ
い、初めての接吻の快感が唇から全身に広がっていく。

「ん……んんっ……ちゅっ、ちゅぷっ」

唇が溶けてしまうのではないか。溶けた唇から快感神経がむき出しになり、絡みあ
って快感を高めあっているのではないかと思うほどに快美感は激しかった。完全に頭
に血が上って、自分が何を考えているかもわからなくなってしまった。

「うふふっ。キスの間、息をしちゃだめなんてこと、ないのよ。ね？」

おねだりするように目をつぶって唇を突き出してくる美里が色っぽい。清楚なブラ
ウスとミニスカートはいつもと変わらないというのに、彼女の表情一つでこれほど変
わるものなのだろうか。下唇がちよつと出ている受け口がなんだか可愛くて、思わず
自分から唇を重ねてしまった。

「ちゅっ、んんっ……んっ、んちゅっ」

柔らかい唇から母親の舌が覗いたかと思うと、息子の唇を撫でるように舐め回して
くる。それだけで背筋の毛が逆立つほどに気持ちいいというのに、口裂をさぐる舌が
唇を割って侵入してくると、そこを中心に身体が溶けてしまいそうな愉悅が痺れとと
もに全身に広がっていく。

「んっ、んふっ……ちゅっ……」

お互いの唇を吸いあうだけでも心地よく、舌を吸われれば全身が熱くなり、口内をさぐられると肩をすくめたくなくなる。お互いの舌を触れさせると文字通り未知の感覚が快楽中枢を刺激し、ザラつく舌が唾液のぬめりをからませてお互いからませあう快感はたとえようもない。

初めてのディープキスの感覚に他のことが考えられずひたすらに唇を貪る息子に対し、さすがに母親は経験豊富だった。息子の唇と舌を味わいながらも手で息子のもつとも敏感な部分を愛撫するのも忘れない。

「んっ、くうっ……んっ、んんちゅっ、んんくっ」

思ってもみなかった二カ所責めに全身の肌が粟立つような愉悅を感じる。美里の指がリング状に丸められ、優しく握られたペニスはそれだけでも気持ちいいというのに、時に優しく、時に強く握りながら優しく上下して肉竿をしごかれると、いきなり暴発してしまいそうなほどに気持ちよく、一気に射精感が高まっていた。

「キ、キスつてすごいんだね……こんなに気持ちいいなんて」

「気持ちいいでしょう？ 気持ちよくなって、モヤモヤなんか忘れちゃいなさい」

美里も快感を感じているのだろうか。黒瞳を潤ませたまま頬を赤らめているのが美

しく、同時に可愛いとすら思ってしまった。かすかに開いた唇があまりに艶やかで、リビングの照明の柔らかな光が肌理の細かな肌を魅惑的に彩っていた。

「苦しいのも、せつないのも、全部出して気持ちよくなっちゃえばいいのよ」

ねっとりとした囁くような声が耳にからみついていく。その声だけでも股間は敏感に反応してしまい、ビクビクとカウパー氏腺液を分泌してしまう。母の柔らかい掌を粘液で汚してしまう背徳感が薄暗い快感を引き出していた。

「くすっ。元氣いっぱいね。聡君はじっとしていいのよ。ママがしてあげる」

ソファに息子をもたれさせると、母の手が少年のシャツをまくり上げていく。むっとするような汗の匂いも、年上の女性は全く気にしないようだ。むしろうっとりとした風情で愛息の肌に顔を近づけていく。

「お肌、すべすべね。うらやましくなっちゃう」

少年にしてみれば美里の肌の方がよほど柔らかくすべすべしていると思うのだが、母親にしてみれば息子の肌の感触は格別らしかった。はだけさせた胸を丁寧、そして撫でさすり、愛息の快感を引き出していく。

「う、うわっ……そんなところまでっ」

「くすっ。身体中全部が大事な息子の身体だもの。そんなところなんてないのよ」

愛しげに撫でさすりながら、吐息も熱くなっている。母の吐息が滑らかな肌にかかるだけでゾクゾクしてしまうほどに若い男の官能は高ぶってしまっている。実の母の手で射精にまで導かれる予感に背徳感が背筋を舐めあげ、快感を揺さぶっていた。

「ん……聡君の匂いがする……。ママもゾクゾクしちゃう」

ぺろり……。母親のピンク色の舌が少年の滑らかな胸板を這った。粘膜に包まれた軟体動物のような異様な感覚がまだ薄い若者の胸板をなぞるだけで電流が走った。ぬめぬめした柔らかくもしなやかな感触が少年の乳首を舐めあげると、意外なほどに鋭い快感で痛いほどに勃起したペニスを震えさせ、さらに固く充血させていく。

「ちよつとしよっぱい……。聡君のお肌、美味しいな」

いつの間にか、母親を押しつけようとしていた両腕から力が失われていた。ソファの肘掛けを掴んで快感をこらえようとする手がかすかに震えていた。

「ま、まづいよ。やっぱり、こんな……」

「そうね。いけないわね。でも、聡君の苦しいモヤモヤを退治する方が大事なの」

きっぱりと言いきる母親の手がちよつと力を入れるだけで腰を引きたくなるほどのせつなくも心地よい感覚が噴き上げる。赤く充血した若いペニスは先端からトロトロと粘液を滲ませ、粘っこい液体をすくった指が亀頭全体に塗り広げる快感に思わず肩

をすくめてしまった。

「聡君が我慢しなくてもいいように、ママがいろいろ教えてあげるわ」

ママが教えてくれる。その言葉だけで背筋がゾクリとする。何を、どこまで教えてくれるのだろうか。背徳感と快感の予感に身体が熱く火照り、下半身に血が集まっているのがわかった。

高まった快感は、射精感となつてすでに下半身を熱く濡らしていた。ほっそりとした指は亀頭部分には優しく触れるだけなのに、全身の毛が逆立つようだ。自分でするのは全く違うハイレベルの快感が腰の奥から突き上げ、ペニスをヒクヒクと痙攣させる。

「もう準備できているみたいね。お口でしてあげるわ。じつとしていてね」

口で。フェラチオをしてくれるのだ。あまりの感激に飛び上がってしまったそうだが、幼い頃から憧れ、慕ってきた実の母親が、その唇で奉仕してくれる。そう思うだけで射精感が高まり、カウパー氏腺液が滲む。

「あの、ママ？ あの、ぼく……」

すっかり喉が渴いていた。幼い頃以来の間近な、柔らかく白い肌。その甘い香りに誘われるように手が動いていた。それなのに、拒否されたらと思うといきなり触れる

ことができずにいた。

「なあに？ ママの身体を触りたいの？ いいわよ。触っても」

息子の思考などお見通しということか、あっさりと許可が出てしまったのは拍子抜けなほどだったが、いざ触れてもいいと言われると喉が鳴ってしまった。

「ボタンをはずしても、ブラジャーを脱がせてもいいわ。ただし、優しくね」

ソファに腰掛ける息子の脚の間に膝をついた母親がねっとりとした視線で見上げてくる。普段のさっぱりとした彼女と同一人物とは思えない淫らな視線だった。そのほつそりとした首筋に手を伸ばし、ボタンをはずしていくだけで手が震えた。シヨートボブの髪に腕が触れて、それだけでゾクリとしてしまう。

思わず鼻息が荒くなってしまうのをこらえながら、一つずつ慎重にボタンを外していく。むっちりと充実した胸元には深い谷間が刻まれ、ブラジャーごしにもその見事なポリウムがはつきりとわかる。

「ママのおっぱい……やっぱり大きいな」

声があわずついていた。喉の奥がカラカラで、身体がひどく熱い。

「くすつ。そんなに緊張しなくてもいいのよ。優しくしてくれればいいの」

ボタンを中程まで外してしまおうと、母親が背中にも手を回してブラジャーのホックを

外してくれた。かすかな音とともに、内圧に耐えかねるようにして二つのカップが弾けるようにして浮き上がった。

「下にずらすときついから、上にずらしてね」

言われた通りに下着を上にならずと、綺麗なお椀型の乳房はかすかに広がったものの、形はほとんど崩れていないようだ。ブラジャーもその見事な隆起の上からずれ落ちもしないのは、乳房の盛り上がりが大きいせいだろう。

ごくり。思わず唾を飲み込んでしまう。それほどに魅惑的な光景だ。息子が息を止めている様子に、さすがに恥ずかしそうにしている母親が微笑んだ。

「も、もうそんなに見られたらママ、恥ずかしくなっちゃうわ」

上から美里の胸の谷間を見下ろすのは初めてだった。いつも大きいと思っではいたが、こうして上から見てみると大きさとボリュームがよくわかる。きれいな半球状の隆起が二つ、お互いに押し合うようにしているために胸の谷間がくつきりとして、しかも深い。お互いの圧力でかすかにたわんでいる様子が魅惑的だった。

確か、カップはEカップ。震える手でブラジャーのタグを確認したことを思い出す。お互いに密着した二つの膨らみはいかにも柔らかかそうで、童貞少年の欲望をそそった。

「すごいな……。触るよ」

指を伸ばして、ふっくらとした膨らみに触れると量感ある乳房がたわみ、軽く指を食い込ませるとしっとりとした肌が心地よい弾力とともに受け止めてくれる。そのまま掌を密着させるだけでたっぷりとしたボリュウムに幸福感を感じた。

タプタプと掌を押しつけて重みと弾力を味わい、同時に指に力を入れて食い込ませていくと豪華な重みの中で柔らかく形を変え、たわみ、弾力ある肌が押し返してくる。天国のようだと思った。

「あん……ふふっ。おっぱい、好き？ 男の子だもの、好きよね」

美しい曲線を描く丘陵の頂上にぼつちりと浮き上がる突起に指を触れると柔らかい乳房の中でそだけ固く、ちよつとザラついている。乳輪の粒状感が少し不思議な感じがした。突起を指でつまむようにしながら転がすと、みるみるうちに硬度を増して立ち上がってくる。乳首も勃起する。知識としてはあっても、未経験の若者としては目の前にするのはやはり感動だった。

「柔らかい。ママのおっぱい、最高だよ。すごく気持ちいい」

それは心からの賛辞だった。これほど素晴らしく、心地よいものがあるだろうか。ふっくらとした乳房は手の中で形を変えながら優しく押し返してくる。しっとりとした弾力ある肌の感触がたまらないのだ。

「誉めてくれて嬉しいわ。でも、聡君のも立派よ。もうこんなに固くなつて」

初めての快感の中、とめどもなく先端から先走りの粘液を漏出させるペニスは母親の手で亀頭全体に粘液を塗り広げられヌラヌラと光っている。そうやって亀頭部を軽く触られるだけで身体が硬直してしまいそうに気持ちよかつた。

「そ、そんなにされたら出ちゃうよっ」

もう射精感はかなり高まつており、童貞少年の聡としては腰の奥に力をこめてこらえないと、いつ暴発して不思議はないほどに男性器は猛っている。そんな熱く固くそびえ立つ肉棒を、美里は優しく愛撫し続けていた。

「そうね。聡君のオチンチン、もうヒクヒクしているもの。お口でしてあげるわね」
チロリ、とピンク色の舌が唇を湿らせる姿にゾクリとした。普段あれほど優しく、清楚な母親がこれほど淫らな表情をするのがギャップに心をくすぐられる。

ちゅっ——。軽くキスされるだけで下半身が震えてしまった。敏感な亀頭粘膜にからみつくような、ねっとりとしたキス。上目遣いに息子の反応をうかがう様子がいやらしくて、身悶えしたくなるほどだ。わざと見せつけるように亀頭に舌を這わせると、ザラザラしながらも唾液とカウパー氏腺液でヌメヌメした感覚がたまらない。

「うふふっ。聡君の反応、可愛い。いっぱい可愛がつてあげる」

母親の可愛いという口調だけは昔のままだ。幼い頃に思いきり甘やかされた記憶が蘇り、鋭い背徳感が背筋を貫いた。後ろ暗い快感が膨れ上がり、膨れ上がったペニスを淫らな欲望と愉悦で充満させていく。

「ご、ごめん、ママ。もうイッチャいそうだよっ」

「いつでもイッチャっていいのよ。ママのお口にいっぱい出してね」

そうは言われても、すぐに射精してしまうのはあまりに惜しい。この初めての快感をできるかぎり引き延ばしたい。少しでも長い時間味わっていたかった。

「んんっ……ちゅぶっ、くちゅっ、ちゅばっ……」

両手をペニスに添え、深くまで亀頭を受け入れると唇で亀頭を締め付けながら前後しながら刺激してくる。唇と亀頭の粘膜同士がこすれあう感覚がせつなくも心地よく、カリを通り過ぎる瞬間の愉悦が射精感を深めていく。

（ママにしてもらうばっかだ。これでいいのかな）

してくれる、という言葉に甘えているような気がする。何より、少年自身が恋慕する美里の肉体に触れたかった。

「ぼくも、ママに触っていいんだよね。触るよ」

髪を撫でてあげると、まだ湿ったままながらもよく手入れされた艶やかな黒髪が心

地よい。そのまま円を描くように手を動かすと、母親がかすかに鼻を鳴らした。

「んっ、ちゅっ、んふっ、んんっ……」

かすかに美里の愛撫のリズムが乱れた気がした。竿の根本と中程を左右の手で優しく締め付け、頭を前後させてのピストン運動に、わずかな揺らぎが生じていた。髪を撫でただけでは思うが、母親の愛撫に変化が生じているのは事実だった。

（あれ？ 何か……感覚が違った？）

まだしつとりと湿ったショートボブの髪をかき分け、すべやかな首筋の肌に触れると母親の肌がピクリと反応した。そのまま優しく撫で回すと、確かに年上の女性の肌が緊張し、ペニスへの愛撫がぎこちなくなっているようだ。甘く痺れるような快感は変わらないが、続けざまに押し寄せてくる感覚が弱くなっている。

（もしかして、ママも感じてる？）

その発見は新鮮だった。自分だけでなく母親が、いつも彼の上に立ち、見上げてきた彼女が感じている。そう思うだけでなんだか充実感を感じる。

（ぼくが触ってあげれば、ママも気持ちいいんだ）

母親に快感を与えられるだけでなく、自分でも彼女を気持ちよくしてあげることができる。視界が一気に広く、明るくなった気がした。髪をくしけずるだけでなく、頬

をさわり、首筋を撫でてあげると美里の吐息がせつなげになり、どこか陶然とした表情に雄のプライドをくすぐられる。

「あんっ……んっ、んんふっ……んちゅっ、んんっ」

先ほどまで余裕のあった母親の表情にかすかな戸惑いが浮かんだが、そのまま首筋や頬への愛撫を続けるとうっとりとした風情で目をつぶり、少年が手を触れるのにまかせてくれる。彼女の心地よさそうな様子に少年の興奮もさらに高まっていく。

「ねえ、ママ。このまま、おっぱいも触っていい？」

少年の目の前で母親の乳首が尖っている。呼吸とともに息づく乳房が一瞬だけ硬直した。明らかな戸惑いが母親の美貌に浮かんでいた。先ほどとは違う。女の反応を浮かべてしまった今は、我が子の愛情表現ではなく、男からの愛撫として受け取ってしまいそうだった。

「んんっ……そ、それは……もういいでしょう？」

気づけば美里の頬が赤い。若い男に、自分の息子に感じさせられている羞恥だろうか。感じさせ、感じさせられることにより母と子の関係が変わってしまうのを恐れているようにも思えた。

「いいでしょ？ もっとママのおっぱい、触りたいな」

聡のおねだりには、やはり美里は弱い。もう一度お願いされるとなかなかいやとは言えないのだ。なし崩しに頷いてしまう母親の頬は真っ赤になってしまっていた。

「ん……いいわよ。聡君の好きにしていっていいわ」

口で奉仕してくれる女性の胸を愛撫しようとする少年も彼女に覆いかぶさる形になり、いささか不自然な体勢になるのだがそんなことも気にならない。胸の前を開けてくれた母親の乳房に手を伸ばし、その柔らかかな膨らみを存分に味わう。

ブラジャーがなくなってもなお胸の谷間を保つ美巨乳は、掌からあふれる圧倒的なボリューム感と指の間からはみ出す柔らかさで少年の快楽中枢を刺激した。芯のない、どこまでも指が食い込む柔軟さは柔肌の滑らかさと温かさで、触れているだけでも気持ちいい。柔媚な感触に母の口の中でペニスがビクンと反応した。

「んふっ、まだ大きく、なるのね……んちゅっ、ちゅぷっ……」

うっとりとした表情で息子の男性器を舐めしやぶる美里の顔は赤くなっている。血を分けた我が子の愛撫で感じてしまっている羞恥か美貌をさらに艶っぽく彩っていた。
(す、すごいよ。ママ、色っぽいよっ)

気づけばうなじのあたりまで紅潮している。美里が感じている実感がこみあげてきて、高揚感が男のモノをさらに猛らせる。愛しい女性の口の中で愛撫を受けながら今



にも射精してしまいそうなほどに快感は高まっていた。

「い、いつでも……だ、出していいのよ。んちゅっ、ちゅっ、ちゅば……」

「うっ、ううっ。ママ、すごいよっ」

ザラザラした舌が亀頭を這い回るだけでも気持ちいいのに、カリの裏にまでもからみつき、その瞬間すらもねっとりとした唇が竿に密着し、やわやわと締め付けながらしごきあげてくる。

ピンピンに張りつめた亀頭粘膜が快感に震え、痙攣するペニスをはじめわりと先走りのカウパー氏腺液を滲ませる。分泌された粘液を美里がいかにも美味しそうにするのと鈴口からせつない快感が広がっていく。尿道から何もかも吸い出されてしまいそうだ。

「ママの口が温かくて、き、気持ちよすぎるよっ」

熱く固い肉柱が痙攣とともに快楽の飛沫を全身に振りまいていた。すでに射精感は危険な領域にまで達していて、いつ自制のたがが外れ暴発してしまうかもわからないほどだ。下半身をひたひたと快楽の液体に沈んでいくような感覚に肩を震わせてしま

う。
「うふふっ。まだよ。まだいっぱい気持ちよくしてあげるから……んんっ」

ペニス温かく濡れた口腔にさらに包まれるような感覚。吸い込まれるような感覚に思わず身体がこわばってしまった。初めてのバキューム感覚に龟头が膨れ上がり、敏感な粘膜が今にも破裂しそうなほどに張りつめていた。

「うっ、ううっ」

バキュームを利かせながらカリを舐め回されるとたまらなかった。思わず腰をよじつてしまふ。それほど気持ちよかつた。

至福にある肉棒が痙攣を繰り返し、先走りの粘液をトロトロと分泌させる。それすらもすぐにザラつく舌に舐めとられ、ちゅつと鈴口を吸い上げられると尿道が収縮し、せつない射精感が急激に高まっていく。

「聡君の、ちょうだい。熱くて濃いのが、欲しいの……んんっ」

うっとりとしながらも熱っぽい愛撫が続く。息子に乳房をゆだね、乳首までもこね回されながら母親は熱心に欲望の器官を舐めしやぶり、吸い上げる。その淫らな姿は息を飲むほどで、少年は圧倒されながらも絶頂に達しそうだった。

(で、でも……いいのかな。ママの口に、本当にっ)

実の母親の口の中に欲望を解き放つ。その罪悪感がかろうじて少年を踏みとどまらせていた。背徳感と背中合わせの快感は後ろ暗く、底の見えない深淵のようであり、

そこからあふれ出る欲望の泉は触れるだけで快感を引き起こす。

「き、気持ちよすぎるよっ。ママの口も、おっぱいもっ」

美里の乳房に食い込ませた指が快感のあまり硬直し、震える。その瞬間、びくんと女の身体が小さく痙攣した。熱心に舐めしゃぶりながら、女の身体の奥で何かのスィッチが入ったようだった。

「も、もう我慢できないっ。出るっ」

母親がひととき強くバキュームを利かせた瞬間、激しい痙攣とともに少年の欲望が爆発する。連続的な悦楽が痙攣となり、熱くたぎったマグマが理性の岩盤を吹き飛ばす。白濁する欲望の液体が実の母の口腔奥深くに解き放たれていた。

「むぐっ、んっ、んくっ、んんんっ、んふう——っ」

血のつながった母親の口に欲望を解き放つてしまった悔悟の思いとは裏腹に快感は深く激しい。全身の肌が身体の奥から湧き上がる快感に粟立ち、快感の無数の小泡がはじけ、身体全体を痺れさせる。

断続的な痙攣と欲望の液体の噴出が腰の中心から快感を染み出させていく。女性による放精の快感は自慰のそれとは比較にならないほどに深く、激しかった。心地よくも熱く、身体が重く感じる。

「んくっ、んふっ、んくっ……」

自分でも驚くほどにため込んでいたのか、噴出するスペルマの量は多い。実の母親の乳房に触れながら、舌と唇で愛撫されながらの絶頂は激しく、痙攣するペニスと彼女の口腔や舌、唇に触れるだけでも震えるほどに気持ちがいい。

「い、いっぱい出てるわ……すごいわ、聡君……」

母親は息子の白濁液を一滴たりともこぼさなかった。全て喉の奥に受け止め、飲み下していく。敏感なままのペニスにバキュームを利かされるとせつない快感に腰がひけてしまいそうだった。

はあっ、はあっ、はあっ——。荒い呼吸の中、ついにやってしまったというかすかな後悔と禁忌を犯した罪悪感、そして背徳感の中で目覚めた快感が全身を浸していく。

「すぐく、気持ちよかったよ。ママ」

「聡君を気持ちよくできて、とつても嬉しいわ。……ん、綺麗にしてあげないとね」

まだわずかに染み出てくる白濁液を丁寧に舐めとる。それだけのことで身体が震えてしまうほどに気持ちいい。母親の舌から快樂の毒でも分泌されているかのように下半身が震え、力が抜けてしまっていた。

「もやもや、すつきりしたかしら」

宝物でも扱うかのような丁寧なしぐさで息子のペニスを舐め清めながら見上げてくるその瞳は、濡れ濡れとしてひどく色っぽい。せつなげな、そしてひどく幸福そうな表情だった。

「う、うん。ありがとう、ママ」

「いいのよ。大事な聡君のためだもの。何かあったら相談してね」

陶然とした美里の表情に、さらに欲望がこみあげてきてしまう。相談を受けてくれる。それはこの美貌の母親が、その肉体に息子の欲望を受け入れてくれるということではないのか。

いつの間にか髪も乾いたのか、ショートボブの髪が清楚さを取り戻しているが、赤く染まった目尻が凄艶で、むき出しのままの見事な乳房からも目が離せない。息子の視線に恥ずかしそうに身じろぎするのが妙に色っぽかった。

(ママに相談すれば、もしかして、また……)

背徳感にまみれた少年の欲望はとどまることを知らない。際限もなくただ膨れ上がっていくばかりだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>